



《バラの花を持つ男女一対》1860年頃

2025年 2月1日(土)～3月9日(日)

戸定歴史館

TOJO MUSEUM OF HISTORY

主催：松戸市教育委員会

後援：JOBANアートライン協議会、
北総線沿線地域活性化協議会

協力：新京成電鉄株式会社、流鉄株式会社

はじめに

17世紀、ヨーロッパの王侯貴族や一部の裕福な商人の間では東洋から輸入された磁器が流行していました。特にヨーロッパにはない透き通るような白色の磁器は人々を強く惹きつけ、金や銀と同等の価格で売買されていましたが、その製造方法は長らく謎に包まれていました。

18世紀初め、ドイツでヨーロッパ初となる白色の硬質磁器の焼成に成功します。この成功を受け、ザクセン選帝侯アウグスト強王（1670-1733年）の命により王立マイセン磁器製作所が設立されました。設立から300年以上経った現在も、マイセン磁器製作所は伝統的なラインから最先端のデザインまで多様な作品を生み、ヨーロッパで最も歴史ある磁器窯として世界的に知られています。

令和4年度、松戸市は市内在住の実業家である玉屋亮平氏よりマイセン磁器152点の寄贈を受けました。この152点は、現存数がごく限られているマイセン設立初期のものから現代までを網羅しており、バロックやロココ、アール・デコなど、それぞれの時代の美術様式を反映しています。コレクション全体を見ると、マイセン窯の歴史のみならず、18世紀から20世紀までの西洋美術史をも俯瞰することができます。

本展では寄贈を受けたコレクションの中から38点を公開します。東洋の虎を真似たユニークな図柄、花卉の一枚一枚まで微細に作り込んだ華麗な壺など、多様な作品を通し、鮮やかなマイセン磁器の魅力をご覧ください。



ヨーロッパにおける磁器開発

大航海時代をつうじてアジアや中南米からヨーロッパにもたらされたコーヒー、紅茶、チョコレート(ココア)などの新しい嗜好品は、王侯貴族の社交場における必需品となりました。しかし、当時の上流階級が使用していたのは主に金属食器で、熱伝導率の高い金属は熱い飲みものには適しておらず、また、料理や飲みものの味を損なってしまうこともありました。

一方、同時期に中国や日本から輸入された磁器は口当たりもよく、喫茶にはうってつけでした。加えて、東洋の異国情緒ある装飾や文様、白磁の美しさは人々を惹きつけ、磁器ブームが起こります。しかし、当時のヨーロッパでは磁器の製造方法は判明しておらず、輸入に頼るしかなかったため法外な価格で取引され入手しにくいものでした。

1701年、錬金術師ヨハン・フリードリッヒ・ベトガー(1682-1719年)が、無類の磁器コレクターであったアウグスト強王に捕らえられました。ベトガーは、牢獄のような実験室に軟禁され、厳しい監視の下で黄金の生成を命じられます。しかし、当然ながら金が製造できるはずもなく、ベトガーは1704年ごろから硬質磁器の製法解明に携わります。

1709年、ベトガーの研究が実を結び、東洋の磁器に限りなく近い白色の硬質磁器が生みだされました。これを受けて翌1710年、アウグスト強王は磁器製作所創設を宣言。エルベ川のほとりマイセンのアルブレヒト城に王立磁器製作所が誕生しました。



ルイ・ド・シルヴェストル
《アウグスト2世 ザクセン選帝侯 ポーランド王》
1720年頃 スウェーデン国立美術館蔵

❁ I 東洋磁器への憧れ

東洋磁器の研究から始まったため、初期のマイセン作品には龍や虎、伊万里焼など、中国や日本由来の東洋柄が多く見られます。特に、1720年からマイセンで活躍していた絵付師、ヨハン・グレゴリウス・ヘロルト(1696-1775年)



図1《金彩中国人物文タンカード》
1730年頃

は中国風の人物風景画など、当時の東洋趣味の高まりに応えるような作品を生み出した。

また、この頃多く描かれた図柄の一つに竹虎があります。しかし、アジア地域に生息する虎は西洋人には獅子に見えたためか「イエロー・ライオン」と呼ばれました。この、どことなくユーモラスなイエロー・ライオンが描かれた作品は、食器、壺など、多岐にわたり、高い人気を誇ったことがうか

がえします。《色絵竹虎文飾り皿》(図2)は、虎が描かれた作品の中でも最初期のものです。底裏にはアウグスト強王が所蔵した証として取蔵番号が刻まれています。

柘榴や桃などを参考に染付で描かれたモチーフは「ブルー・オニオン」と呼ばれました。ブルー・オニオンは東洋の模倣という域を脱し、現在もマイセンのアイコン的なモチーフの一つとして描かれ続けています。



図2《色絵竹虎文飾り皿》1725-30年頃

❖ II ヨーロッパスタイルの確立 —バロックからロココ様式へ

当時ヨーロッパで磁器を所持することは、国家の威信を示すバロメーターとみなされていました。磁器による国威発揚を掲げたアウグスト強王は、宮廷彫刻家ヨハン・ヨアヒム・ケンドラー(1706-1775年)をマイセンに投入し、磁器彫刻の制作にのぞませました。こうしてマイセンでは、1730年代から東洋の模倣を脱し、西洋独自の美意識にもとづく作品づくりが始まります。当時ドイツは重厚なバロックから優美なロココへと美術様式の過渡期を迎えており、マイセンの磁器にもそうした影響がうかがえます。



図3《猿の楽団》1930年頃(原型ケンドラー 1765年頃)

ケンドラーは1731年にマイセンに招聘されるとすぐさま才能を開花させ、1733年に20代半ばという若さで主任成型師に就任。アウグスト強王の没後は、《猿の楽団》(図3)のような小型のフィギリン(磁器人形)を多く手がけました。ケンドラーの生み出した作品は根強い人気を誇り、彼の原型は20世紀以降も繰り返し使用されました。

《金彩花飾り人物文飾り壺》(図4)の中央にはロココ様式を代表する画家、アントワース・ワトー(1684-1721年)風の絵が描かれ、周囲を彩る花々は生花と見間違えるほど精緻に作られています。19世紀に製作された作



図4《金彩花飾り人物文飾り壺》
1860年頃

品ですが、その華やかさはケンドラーが活躍したロココ期を彷彿とさせ、影響力が長く続いたことがうかがえます。小花の立体装飾はケンドラーが最初に手付けたもので、高い技術を誇るマイセンの特色として珍重されています。

❖ Ⅲ 19世紀から現代

ケンドラーが精力的に作品を生み出し、マイセンが黄金期を迎える一方、ザクセンを取り巻く外交問題は複雑化していきます。1756年から始まった七年戦争でマイセンはプロイセンの侵攻を受け、磁器製作所の操業は停止状態に陥ります。

戦争が終結した1763年、工場は再稼働しますがなかなか軌道には乗らず、加えて、この頃ヨーロッパ各地で設立された磁器製作所が成熟してきたことも経営不振に追い打ちをかけました。

再興の兆しが見えたのは19世紀半ば頃でした。イギリスに遅れながらも、ドイツも産業革命を迎えたことで新たな富裕層が誕生し、彼らは18世紀のロココ調の作品を好みました。マイセンは生産拡大のため、小高いアルブレヒト城から市内の平坦な土地に拠点を移します。工場の移転により生産力は格段に向上し、収益も増大しました。

また、マイセンは当時ヨーロッパ各地で開催されていた万国博覧会に積極的に出品し、技術力の高さを知らしめました。1867年、パリ万国博覧会出品作がグランプリを受賞。《藍地金彩人物文双耳飾り壺》(図5)も1900年のパリ万国博覧会出品されたことが確認されています。

その後も、マイセンはアール・デコ様式の作品やドイツのデザイン学校バウハウスが掲げた機能主義に影響を受けた作品など、時代を反映した作品を生み、第一次、第二次世界大戦を経て現代に至ります。



図5《藍地金彩人物文双耳飾り壺》
1900年頃